

# ゆりゆりの権と文

雷之電



# 目次

百合の蕾におどろぎしは	1
無責任なペンペン草	9



## 百合の蕾におどろきしは

「……ないですよ？」

いつものことだ。暇な哨戒中、いつもこうして文がレンジファインダーカメラと手帳を携えて、記事のネタを求め突撃してくる。十中八九ただのじゃれ合いに転じるので油を売るといのが正しいだろうか。

「またまたあ。常に暇ってわけでもないでしょう、迷子の報せとか、小賢しい山童の撃退とか。ならず者の晒し上げほど新聞の得意とするものありませんよ」

いやに弁が立つ。だからこそ胡散臭さがつきまとい、余計に購読者を減らしている。

「そういうえば一つありました。この間、白狼仲間とハシボソガラスの焼き方を研究して、成果を持ち寄ったんですが——」

「だああもう！またそんなこと！次やったら寮に狼の屍肉を——」

「やっぱ素焼きが一番ですねえ。ちようどいい、あなたでも捌いて帰りに特大の七輪で一気に焼いちやいましょうか」

鉄の塊みたいな支給の刀（？マチエーテ？）を翼にあてがうと、顔を真っ赤にして固まった。

「……旧友によくも刃なんか向けられますね」

「旧友だからこそ、ですよ。まだ説明せんなりませんか」

「はあ、もみちゃんなんて呼んでいた時に戻りたい」

自分も気づくと固まっていた。釘付けになっていた。寒々しい岩肌の上でこんな気分を自覚させられるとは思ってもみなかった。翼のために洋服に空けられたひし形の穴から見せつけられる、自然と鍛え抜かれた、震えるその背筋が、なんとも

……つまるところ、私犬走棍は、異種同性幼馴染たる射命丸文に、欲情していた。

「……あなたを品もなく食い散らかす前に、今日はもうどっか行ってください」

今はなんだかいつもと違う。それは文も察し、すこすこ飛んでいった。引き際をわかっているのも文だけだ。そこから一人。一人で暇を持つと様々考え込んでしまうものだ。

「……、」

思い返せば、確かにそうだったかもしれない。バイアスがかかっているので因果の確信はできないが。周りが当たり前にしている馴れ合いに禁忌を感じ避けていた。それと男勝りといえそう……かもしれない。そのうえ軟派を封じて硬派ぶっていた。

やっぱり変に考えすぎてしまう。変なのかどうかもわからなくなった

混乱している。わからないことが多すぎる。

これを誰か、無責任に話せる相手に相談したとして、「めつちゃかわいいう女の子にドキツとした」といえばきつと恋だの面喰いだのと言われるだろう。しかし本当にそうか？「肉の流動にそそられた」とか「トリ肉を見たら涎が出た」ともできてしまう。あの背中を見て欲情したし、言い換えればドキツとしたし、鴉天狗を食べること自体に抵抗はなく、むしろ一度食べてみたいとすら思う。

うざ絡みもなんだかんだで安心するし、今までずっと苦楽を共有し助け合ってきた。

だからこそ、友人なのか？

だからこそ、恋人なのか？

情欲を自覚してしまった今、これまでの友人関係は維持できる自信がない。

かといってこれを恋愛と呼べるかも、わからない。

「だめだこりゃ」

いつの間にか交代時刻ぎりぎりになっていた。よりによってその時、河童じるしの発煙弾が籠で上がる。早くには帰れない。そうだ。

妖怪の山というだけあって有象無象がはびこっている。勝手に人を食うくらいなら放っておくが我々天狗に手を出せば容赦しない。今回は有象、形ある妖怪なので脳筋野郎たる白狼天狗が召集された。

「でっかい……い！」

人間の思いの数だけ妖怪がいる。いちいちそんなもの、気にしていられないから、ただその肉体を一度滅ぼすだけだ。人間の四肢が無数に集まったそいつが阿鼻叫喚の中心にあった。

戦闘時、主戦力となる我々は基本使い捨て。天狗を守るため天狗を捨てる。社会という一つの生命として考えれば自己犠牲だが実際は一部の、鼻の高い真つ赤な天狗らしい天狗を守るため下っ端が殺されているだけだ。

いくら斬っても別の手がこちらを掴みにかかる。

「ほんと、犬つて馬鹿なんだからー!」

襲われたらしい荷車から菜種油の瓶を取り、投げる。脳筋の一球は凄まじく、奴の腕一本に当たると派手に割れた。それから小麦粉を撒き火種を投げる。火柱は見事敵を焼いた。死傷者はすでに退避させた……はず。

怪力の天狗とはいえばかでかい山刀モドキを振り回すのは骨が折れる。文字通りとなることすらある。どうせ片手じやうまく扱いきれないので、最近は盾を捨て両手で操っている。

「やあ見事。派手にやりましたね。見出し考えなきや」

文。どこから見ていたのか、全て押さえたいらしい。

「節操のない記者は嫌われますよ。もう落ちるところもありませんが」

「さつきからどうしたんです?まさか犬にも人並みの生理が?」

気づけば文の首根っこを掴んで詰め寄っていた。

「……さつき言つたら、腹減つてんだ、身ぐるみ剥いで焼かれてえか」

やっぱり距離感、わかつてなかった。自分もそうだ。ここまで言う必要なんてなかった。突き放し帰路につく。

本職の気分を文に露わにしたいくはなかった。旧友との関わりくらい、昔のまま残しておきたかった。なにの文も私も、うんざりするくらい成長していて、他のことで忙しくもなっていた。

自分だけ、そんなことにも気づかないで、一人昔に取り残されているのかもしれない。

あの面喰いな恋煩いも成長ゆえなのだろうか。

結局どか食いして、なんの感動もなく腹十二分満たして、闘技場の地下みたいに血なまぐさい浴場で身体を清めたのか汚したのかして、そそくさと床についた。眠れそうにない。夜の更けるほどに、胸中の情も無尽蔵に鬱積する。

それを晴らそうにもここは二人部屋。どちらかがおつ始めると何となくわかる。小つ恥ずかしくて自分ではできなかった。……確かに、おつ始めたら黙認して、さつきと寝てしまうという不文律はある。仕方ないし誰も咎めやしない。

はて、この腐った天狗社会、同性愛を容認するだろうか。みな当然のようにムツツリしていて、気がついたら異性との自由恋愛で結ばれ、突つき合っている。この短い半生の中で同性がどうこうというのは聞いた試しがない。

よりよって自分ひとり、というのはありえないと思う。他にも同じことを考えている人がいるに違いない。みなどう

しているんだろう。

そして何より、相手は鴉、さらには幼馴染。告白というぎこちない通過儀礼を突きつけたとして、文はどう思うだろう。価値観の一つとして認められるかすらわからない。

自分はどうか？自分が自分自身の内にあるアブノーマルを自覚したとき、どう感じた？

……一瞬。ほんの一瞬、嫌悪した。……それから、誰を好こうが当人の勝手だと、思い直せたか？否。それは先送りして、ただ狼狽していた。

好きなのか？あの子のことが？もちろん昔からの大親友として、大好きと言える。けどそうじゃなくて、……あれ、好き、とは？

「……あ、」

気づいたら暗れていた。寝たふりか、寝たのか、ルームメイトは部屋の反対側に敷いた布団の中で、こちらに背を向けて動かない。

「はあ、……最低だ」

大親友をおかずに飯を食うなんて。密かに信頼を裏切った気分でさえある。が、同時に、彼女への得体のしれない感情を、少し呑み込めた気もした。

……めちゃくちゃ怖かった。ほんとに食われるかと思った。気弱でいつちよまえに怒りんぼのお子ちゃまだつたあの権も、弱気を守る強靱な骨格を身に着け、ついでに天狗の生活圏を守っている。

しかしだ、どんなに強い肉体で自身を固めたとしても、もちもちふわふわの子犬ちゃんみたいなオーラは隠そうにも余りある。油を売ったとき出てしまう気の弱い芯を感じて、ああ、いつもの、私の知るワンコロなんだと、安心する。

ワンコロは気弱だから強くなったし、鳥頭は鳥頭だから事実の記録を始めた。たぶん。

さつき……権を怒らせて逃げたとき……から、権の背中をはるか遠くからこそと覗いているが、権はあぐらをかいて、立てた腕に顎を乗せたまま微動だにしない。……後ろ遠くからというのは千里眼と聴い耳への対策だ。道一つ挟んだくらいではあの犬耳で感づかれるし、いくら離れていても視界に入れば見つかってしまう。

ここまでしつこく一匹の犬を追いかけ回すとは、私ってよっぽど暇なんだ。まあ新聞とはいえ週刊だし。配つても妖精の



おもちゃか窓拭きにされるのがオチだし。

やっぱりこの職は人のためじゃない。自分のためだ。

椀の頭が動いた。それからふわふわと籠の森へ飛んでいく。

行つた先は小さな戦場だつた。見たことのない巨大な妖怪が何人もの白狼天狗にとり囲まれている。無数の手足が怪力で天狗たちの体を引き千切っていくのが見える。

そんな中で、あのワンコ口が、この異形に相対し肉薄していた。何を欲すのか

絡みつこうと迫る四肢、というか千肢を、あの非合理に重い刀で一本ずつ叩き切っている。

ありや狼、あるいは立つ狂犬だ。私の知る椀は今この瞬間、死んでいた。周りに散る死屍には見知つた者もいることだろうに。そうしてなお巨悪に立ち向かう意志が勝つ。椀の人格は、こんなやつに殺されていた。

爆炎が上がる。千肢がきれいに炎に包まれていた。まったく器用な技だ。切つていてはきりがないうちに気がついたらしい。馬鹿正直さまで失つたとは。

皆の気が緩んだことを確認して、あの炎がそのまま写つたように全身に血を浴びた椀に駆け寄る。

「やあ見事。派手にやりましたね。見出し考えなきや」

彼女のことがたまらなく怖かつた。しかしだからこそ、かつての面影を見出したかつた。人の死を踏み越えてまで、そうしたかつた。

幸か不幸か辛うじて死を免れた負傷者の叫喚を背に、狼にも劣らぬようにと地を踏ん張り背筋を伸ばす。

「節操のない記者は嫌われますよ。もう落ちるところもありませんが」

椀だ。狼なんかじゃない。血と狼の皮を被つた、犬走椀だつた。

「さつきからどうしたんです？まさか犬にも人並みの生理が？」

しかし直後、私の首を持ち上げたのは、狼だつた。

「……さつき言つたら、腹減つてんだ、身ぐるみ剥いで焼かれてえか」

今までに聞いたこともない、低い唸り声に乗せて吐き出された言葉だつた。いつもぶんすか怒つていたあの椀が、ぶんすか

でなく、煮える己の苛立ちを懸命に抑えて、言葉を紡いでいた。軽く胸を突き放される。さつきと行け。でないと食つちまう。そう含ませそうした。立ち去るほかなかつた。

ほんとに嫌だったのかな。今まで油を売ってきたことが。互いが違う道を歩み始めたことを憂えて、ついちよつかいを出していた。こうでもしなきゃ前みたいにじゃれ合えないと思って。

帰った。古ぼけた長屋の汚い一室。いくら散らかっていようと、隅の机にだけは物を置かないようにしている。ここがなければ原稿も書けないし仮眠もとれない。肩がばつきばきになるのは覚悟の上でだ。

この廃人のたまり場で。一つ足のカラスが一羽鳴く。

今日は非番。寮全体が慌ただしい。昨日の件で部屋とペアに空きができた分の再編成が行われていた。

目の前で死んだルームメイトの肉塊を自ら持ち帰った子がいた。そこまで執着していると新しいペアとも馴染めない気がするが、ああいつたのは目を離すと勝手に自殺などしだすので嫌でも誰かとくっつけなければならぬそうだ。

「椀ちゃん、これ」

部屋の扉にかかっていた巾着袋をルームメイトが手渡してきた。あずき色のそれにはブルーブラックの字で「犬走椀」とだけ記された紙がついている。

中身は卵だった。たった一つだけ、細かい紙くずに包まれて。

「あのバカ……」

あの鴉なりの最強のジョークだ、これは。昨日の生理のくだりにかけている。……誤解のないように言っておくが天狗も基本的な身体の機能は人間と変わらない。

きつと昨日強く当たってしまったことについて、ジョークを上塗りすることで、気にしちやいなと言いたいのだ。ドアホだが器用な鴉だ。

行かなければ来るだろうか。あいつ、こちらのスケジュールと日課はすべて把握している。来るとしたらここまで寄り道もないだろう。こつちもふわふわの白い子犬を六匹くらい用意してやろうか。「できました」つつつて。

案の定来た。ついでに早朝刷ったばかりの号外も携えて。

いつも非合理的な高さの下駄を履いているが居間で脱ぐと私より少し小さい。線も細くてちんちくりん。ここでならいつでも食べる。

「おいしいですか、それ」

「目の前であの卵を殻ごと食ってやった。なぜかちよつと頬が赤い。」

「そっちが持ってきたギヤグでしように」

「とつ、ところで何日目？」

「何日目もなにもありませんか。もう最つ高に凜々しい殿方に止められましたよ」

「ものすごいショックを受けている。いちいちかわいい。」

「そんな……」生喪女同士傷を舐め合っていると本気で信じてたのに……」

そのうなだれる首元。自分が昨日掴みかかったところ。開いた襟元から見える、年相応のまばゆい柔肌。故障だらけ、傷だらけの自分とは大違いに美しい。まずい、抑える……

あの卵、もつと味わつて食べればよかった。

「どうされました？」

「いや、お腹空いちちゃつて」

また釘付けになつていた。意識しだすと止まらない。

「さつきご飯食べたんじゃないんですか。ここに貯まりますよお」

腹をわしわしと挿んできた。仰向けに倒れてなすがまま。これじゃ大型犬だ。

「あれ、もつとぶにぶにしていると思つたのに。おかしいですね」

「残念。大食いだけど全部使いきれんよ。それと——」

この上ないくらいに幸せ。自分のテリトリーが文の匂いに侵されていく。古い畳と新聞紙、ペンのエボナイト軸に……すぐくいけない匂いがする。すぐくいけない！

「——なんで、敬語」

ぎこちない。うんざりするほど、ぎこちない。互いに作つていた、わからない距離感ゆえ張つていた予防線を解くには、あまりにぎこちなかった。

「……ごめん。どうやって話してたっけ。わからなくつて」

馬乗りの文がたじろぐ。外で冷えた腿が全幅の信頼と図々しさを以つて私から体温を奪つていく。

「やつぱり変温動物なのね」

「さて。捌いてみればわかるんじゃないですか」

「カイボウの準備はいつだって万端だけど」

スカート裾の裾を指先でちよいと引つ張ってみせた。

「……どこまで本気かわかんないな」

ままよ。

「どいてくれなきゃ本気でいくけど」

ぎこちない通過儀礼の代用となるだろうか。

「……察じやまずいでしょように」

すつと降りた。たった一拍の間をおいて。かけたカマをいとも簡単に躲してみせた。

「ほんつと、ずるい鴉だこと」

ぶん殴りたくなるほどに。

……本当に躲したのか？ 嫌なら素直に、づべこべ言わず降りればいい。しかし両方の意味を、わざわざとつてみせた。いやそんなわけ。十中八九脈はない。そのうちのーなど引けるのか？

「……お茶にでも行きましようか。ああそれと、一人でお楽しみのおと、犬の前に腰持つてきちやだめですよ」

## 無責任なぺんぺん草

大通り。日時を問わず、どこからか湧いて出る天狗たちでいつもごった返している。耳にも鼻にも多大なストレスをかけるので白狼天狗はわざわざここを通ることがない。クソみたいな香水文化の被害者だ。

ガヤガヤしているぶんにはまだいいのだが、突然大声を出す酔っぱらいやシラフの同年代が紛れているのが厄介だ。十分に一度くらいそんなやつに出くわして、めまいや脳震盪に近い感覚で動けなくなる。

「……ごめん。脇道行きましょう」

表の奴らは一体何を目的に大通りを歩いているんだろうか。鴉は集団でいないと寂しさに死ぬのか。

「同族でも嫌気が差すなあ……一人ずつ口を縫い付けてやりたくなる」

文も基本一人で行動している。昔から一人でなにかに没頭していることが多く、そのときは自分も蚊帳の外だった。

店の前の長椅子に二人並び同じごま団子と抹茶を頼んだ。ゴマ団子には油が多くついたほうがいい。その後のお茶がうまくなる。ごつてごつての油そばを食べたあとのお冷がうまい、みたいな。

だからお茶は冷ます。

愉しみ方に品がない。まあ犬だし。犬食いしなだけでした。

「しかし抹茶つて、どこ行つても少ないですよね」

「そもそも愉しみ方が合つてないんですよ。それならビールでいいでしょうに」

「ごもつとも。どうせ兼業で憲兵だし、朝つばらから潰れるほど落ちぶれたつて皆からのイメージは変わらないだろう。」

「何もかも少なすぎです。チャーハン行きましょう」

こんな無茶ぶりにもなんだかんだ付き合つてくれるのが文だ。

入ったのは、どうして生き残っているのか不思議でならない。埃っぽい個人料理店。

「わかります。たまに『鳥舌』ながら店のレポートなんか書くんですがね、こんな小汚い、じーちゃん一人がいたらら作つてするような店ほど安心のおいしさが潜んでるんですよ」

「犬も鳥も変わりませぬね。私もこういうとこ、大好きです」

安心のおいしき、即ちテツパンの味。変に素材に執着したり、独創的だったりするものは、地雷率が高めに高い。それと

人が入っているところほど（個人的に）合わないのだ。

基本の味というのは、絶対的な味の保証があるから基本とされているもので。そこをわきまえてこそ、掟破りが成り立つ。こだわり抜かれたラーメン屋の煮干し臭いラーメンよりも、中華料理屋でただレパートリーの一部として存在するラーメンの方が、地雷を踏み抜く率は圧倒的に低い。文とはこれを共有できている。

しかしここはニュアンスが違った。このチャーハンはまさに基本のキの一画目、炒めた白米の卵とじ。これこそ炒飯だ。

店主に言わせると、具なんか入れたらそれは野菜炒めなんだそうだ。言いたいことはわかる。

「犬食いせん勢いですね……」

自分だけ頼んだ白米の卵とじを口にかき込んで丸呑みし水を流し込む。水で流し込むのではない。飲んだ後の口に水を流し込むのだ。これだけで、妖怪の山で磨かれたくだらない天然水が、桃源郷の桃の果汁に変わる。

「……ところで、あのでっかい刀は持ち歩かないんですか」

制服の袴に大小を帯びている。

「ああ、官製大々刀ですね。アトラスの腕を斬って空を落とすんでもなきや、邪魔なだけです。鴉の羽を削ぐなら打刀で十分ですよ」

実は冗談でもなんでもない。

「しつ親友をそんな……！」

文が大げさに驚いてみせる。

「大真面目です。M G M G……街じゃ憲兵ですから。変な真似すればとつ捕まえねばなりません。んくつ、そりや向かつてきたら叩き斬らないと」

「……」経験は

「経験人数は二人！仲良くなったヤク中と、強盗でしたね」

クソツタレにも大天狗を立てるためだけにガチガチに固められた規律とヤな接待めいた上下関係に嫌気が差し重大な犯罪に手を染めるものが、多からずいる。ルールが犯罪を助長する。

「まあ、あなたが有機溶剤を他人にまで吸わせるような奴じゃあないことくらい、わかってますがね。万一、いや万劫に一秒ですよ」

むしろ自分が彼女を押し倒すほうが現実的だ。……今にも。溜め続けていたら間違ひなくそうなる。

「どうしました？」

「つえ、あ、いやなんでも」

じつと皿の底を見つめていた。何か考え始めると動きが止まってしまふ。

「こんな子が人なんて斬れるんでしょかねえ」

「ぼつ馬鹿にしないでくださいよ！人くらい下ろせませすつてばー」

なんか疲れた。というので昼前にお開きとなつた。

どんなに親しい仲であれ、人付き合ひというのはどんと疲れる。一人でただ山を哨戒していたほうがよほど気楽だ。戦闘となれば地獄と化すとはいえ、自分の天職かもしれない。

——だから貴重な休日こそ一人でいたいんだ。

そのくせ……そのくせ、文との最難関のコミュニケーションに足を踏み入れようとしているんだから救いようがない。

そう、最難関のコミュニケーション。どうしたものか。それも天狗社会に前例を聞かない禁忌じみた関係付きで。

まず他人の反応を試みるか。密告から病棟に監禁、なんてルートはない……と思う。一世紀も前のヨーロッパにあるまいし。

そういえば、前例を聞かないとは言つたけど、本当にそうなのか？暗黙にタブーとされたのは、実は最近だったりして。とりあえず男性同士だと、森蘭丸はやりまくつてたつていうし、硬派、軟派なんて言葉があつたし。まあ男女で社会的に事情が大きく違うけれども。

ああ、ルームメイトの話もせねばなるまい。彼女は薺（なずな）。内気でものぐさ、*「差し障りなき」*の塊で、二人棲むのに都合いい、人数合わせの権化みたいな子。五尺弱ちんまい、肩までの直毛を、寮でいつも下ろしている狼。

良くも悪くも、期待通り話を進めてくれる。

そしてその日の宵の口。

「薺さん」

腹いっぱい食べてぐーすか寝ている彼女に声をかけてみると、その耳だけが反応した。  
「起きてください。大事な要件です」

こちらから話す機会など、いつもはルームメイトとして最低限の馴れ合いの他にない。こんなに思いつめた自分の口調を耳にすることはなく、何事かと布団から這い出てきた。

正座して正対する。言いにくいどころじゃないのを齎も察しているようで、居心地悪そうにもじもじしている。

「いえ、別に明日死ぬとか、そういうのじゃなくて」  
長い沈黙。無責任に話せる相手だとはわかっていても、どうにも言い出せない。このへんな間が、言いにくさに拍車をかけている。

それも彼女はなんとなく察しているようで、さっさと切り出した。

「えっと、昨晚のこと、……ですよね。なんか、珍しいなつて」

「……他人のに聞き耳立ててる雌犬が相手と知って安心しました。話せそうです」

「いえ、そんなんじや、あついや、その、……勝手に安心してくださいな」

打ち明けて、万が一にも拒絶されたら。不安がよぎる。

「いつ、言いにくいなら、今日じゃなくたっていいですよ。誰だつてありますし」

「誰だつてないんですよ。同性を好きになるなんて」

話の流れにむりやり主題を乗っける。言いにくいことを言うときの、私の常套手段だ。

当然、聞かされた彼女はあつげにとられていた。そして勝手に真つ赤になって潰れている。

「あーつと、あなたじゃありません」

「んや、えっと、文さん……ですよね」

頷く。

「ん、とね……私に何を聞くにしろ、私が他人の恋愛観に口を出す権利なんて、ないと思います」

「いいんです。あなたならどうするか話してもらえれば」

寝ぼけた頭なりに、彼女は考えて、首肯した。

また間の悪い沈黙が続いた先で。

「こんなこと、聞いたこともありませんか……拒絶されたらつて。だけど、もう私が友達のままじゃいられないんです。ど



う転ぼうと」

「……つまり最低限、近づくか離れるかはして、……あわよくばくつつきたいつて、そういうこと、ですよ。進むべきか退くべきか、進むしかないでしょう」

自ら退いて離れることはできない。そんなタチだと、彼女は知っていた。進んで、相手が近づくか離れるか、委ねるほかないと。

「進むとして、最善策を練りましょう。文さんつて、ああ見えて繊細ですから」

しかしだ。青二才の犬に策を練る能などあろうはずがなかった。

「ない、のなら……突撃してはつきり言つてしまえばいいんです。繊細ゆえ」

「……そう。ありがとうございます。無責任が励みになりました」

はえ、と首を傾げる彼女を尻目に、急いで着替え部屋を出る。犬ぞりのごとく駆けて向かうは、そう。考えるな。襖を叩く。

もう後戻りできない。後悔か希望か、腹がひっくり返りそうだ。

ペンを締め訝しげに近づく音のち、ついにシミだらけの襖が開いた。

「ちよ待——」

倒れるように抱きついて押し倒す。

「……もふもふですね」

「そうじゃなくて」

痺れていた。勝手に一人で『幸せ』に食われて、何も切り出せないでいた。そして我に返る。

「……また一人でお楽しみで。犬の鼻舐めないでくださいよ」

「あなたがこんなにさせたんでしょう。責任とつて全部食べなさいな」

「私にやナイフもフォークも……犬食いしか」

——そんなのわかってますよ。行きましよう

「ゆりゆりの権と文」

小説ID : 257113

雷之電

Generated by ハーメルン